パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第 14 号）

「サマルカンドでの第４３回ユネスコ総会とユネスコ憲章採択８０周年」

２０２５年１１月２８日

ユネスコ日本大使の加納です。

今回は、１０月３０日から１１月１３日までウズベキスタンのサマルカンドで行われた、第４３回ユネスコ総会を中心にご紹介します。

サマルカンド市内のレギスタン広場

（ユネスコ総会）

ユネスコ総会(General Conference)は、全加盟国が参加して２年に１度開催されるユネスコの最高意思決定機関です。次の予算年度（２ヵ年）予算を承認したり、執行委員会や総会下部機関の委員国を選出します。また、４年に１度には執行委員会が指名した事務局長を正式に任命する役割もあります。

ユネスコ本部が置かれるパリ以外の場所で開催されるのは、１９８５年のブ

ルガリアのソフィアでの開催以来４０年ぶりです。ウズベキスタン政府の歓待ぶりが印象的でした。一連の会合はサマルカンド旧市街の東にある国際会議施設「シルクロード・コンプレックス」で行われ、初日の１０月３０日の開会式にはミルジヨーエフ・ウズベキスタン大統領も出席しました。

ユネスコ総会の会場となったシルクロード・コンプレックスとミルジヨーエフ・ウズベキスタン大統領の演説

開会式の後、メインとなる全体会合（プレナリー）では各国政府代表による一般政策演説（General Policy Debate）が行われます。並行して、教育、科学、文化、コミュニケーション・情報など各分野ごとの委員会(Commission)が開催され、当該分野の予算案審議など、関連議題の審議が行われます。

日本からは文部科学大臣が出席するのが通例ですが、今回は日本の政権交代と時期が重なったため、増子宏・文部科学事務次官が日本政府代表として一般政策演説を行いました。

増子文部科学次官（日本政府代表）による一般政策演説(出典：ユネスコ)

（アズレー事務局長退任、エル・アナーニー新ユネスコ事務局長の任命）

今回のユネスコ総会のハイライトは、８年ぶりの事務局長の交代でした。

エル・アナーニー及びアズレー新旧事務局長（出典：ユネスコ）

２期８年を務めたアズレー事務局長は今回の総会を最後に１１月１４日に退任します。１１月５日に行われたクロージング・セレモニーの際には、同事務局長の貢献に対する賛辞(tribute)の決議が採択され、６つの各地域代表からの感謝のスピーチが行われました。その後の各国代表の懇談において、私からもアズレー事務局長に対し、労いと日本との協力関係についての感謝の言葉を伝えました。

アズレー事務局長と筆者（出典：ユネスコ）

その翌日、１１月６日には新事務局長の任命が行われました。エル・アナーニー候補が１０月の執行委員会で圧倒的多数（５５票対２票）で指名(nominate)されていますが、正式な任命(appoint)は総会の権限です。このため、全加盟国による秘密投票が実施されましたが、同候補がやはり圧倒的多数

の賛成（投票総数１７４票のうち１７２票）により選出されました。

８日には、同次期事務局長と個別に意見交換を行いました。選挙期間中に既に何度も会っていますが、正式選出後に会うのは初めてでしたので、改めて祝意を伝え、日本として新事務局長の下でのユネスコを支援する姿勢は変わらないことを述べつつ、緊密な連携を確認しました。

エル・アナーニー次期事務局長との意見交換

（執行委員会及び総会下部機関の選挙）

ユネスコ総会には事務局長の任命のほか、ユネスコ関係機関の選挙、すなわち、執行委員会(Executive Board)や、総会の下に置かれる様々な下部機関(Subsidiary Organs)のメンバー国を選出する重要な任務があります。今回は１１月７日に執行委員会の選挙、１０日に総会下部機関選挙がありました。

特に、年２回開催され、加盟国を代表してユネスコ事務局の活動をチェックし、総会に代わって意思決定を行う執行委員会の役割は重要です。５８カ国で構成され、６つの地域グループに議席が配分されており、任期は４年。２年に１度の総会の時に約半数ずつ選挙されます。日本は１９５１年の加盟以来、一貫して執行委員国を務めています。今回、日本が属するアジア太平洋グループ（グループⅣ）では日本を含む６議席が改選対象となりましたが、立候補したのは議席数と同じとなり（「クリーン・スレート」と呼びます)、立候補した６

カ国全てが当選しました。このうち日本、中国、インドの３カ国が再選、残り３カ国には、これまで委員国を務めたフィリピン、ベトナム、クック諸島に代わり、タイ、マレーシア、キルギスが新たに選出されました。

今回、注目されたのは、中東欧グループ（グループⅡ）の選挙です。３つの議席を４カ国、すなわちウクライナ、ロシア、ルーマニア、モルドバが争う構図でした。ロシアは２年前のユネスコ総会で加盟以来初めて議席を失い、雪辱を期して活発に選挙活動を行っていました。こうした中で、グローバル・サウス諸国の相当数はロシア支持に回るのではないか、他の３カ国の１カ国が弾き出されてロシアが執行委員会に戻ってくるのではないかとの悲観論が多くの欧州諸国から聞かれました。

しかしながら、７日に投票（秘密投票）が行われ、いざ開票してみたら、ウクライナ、ルーマニア、モルドバはいずれも１３０票以上を獲得したのに対し、ロシアは９０票台にとどまり再び落選しました。さらに、１０日に行われた総会下部機関選挙でもグループⅡは４つの機関で競争選挙となりましたが、ロシアは競合相手（ラトビア、リトアニア、ポーランド、チェコ）に全敗するという結果に終わりました。

ユネスコでのウクライナ問題をめぐる議論、投票（記名投票）において、グローバル・サウス諸国の相当数が西側諸国とは異なる姿勢、投票態度をとっています。背景にはロシアとの経済、軍事面での協力関係や、中東問題での西側諸国の対応への不満の現れなど様々な要素が考えられます。しかしながら、それは必ずしもこれらの国々がロシアの行動を是認しているわけではない。今回の投票結果は、そのことを示しているように思われました。

（総会期間中の様々なイベント）

２年に１度のユネスコ総会は、１９０超の加盟国から政府関係者、各国のユネスコ国内委員会や市民団体関係者など様々な人達が集まります。これらの人達を対象に多くの国々が様々なイベントを催します。

特にホスト国のウズベキスタンは熱心でした。市内でコンサートや週末のマラソン大会などを開催したほか、ユネスコとの協力による正式なイベントとして、人工知能(AI)の倫理的活用のため顕著な活動を行った研究者を顕彰する賞として、１１世紀の中央アジア（現在のウズベキスタン）で活躍した科学者ベ

ルーニィ(Abu Rayhon Beruniy)の名を冠したユネスコ・ウズベキスタン・ベルーニィ(Beruniy)賞を創設し、その授与式と記念晩餐会を開催したのは大変印象的でした。

このほか、欧州（北欧、ギリシア)、アフリカ（タンザニア、アンゴラ)、中南米（パラグアイ)、アラブ（アルジェリア)、アジア（キルギス、マレーシア、中国）の代表団が自らの選挙活動、あるいは自国のユネスコでの貢献をアピールするためのレセプションをあちこちで開催していました。全てに出席するのは困難ですが、社交と情報収集を兼ねて、私もできるだけ顔を出すようにしていました。

また、ユネスコ事務局が主催したいくつかのサイドイベントの中で、コミュニケーション・情報局関連の表現の自由に関するパネル・ディスカッションには、ルクセンブルクの副首相、チリ及びスウェーデンのユネスコ大使とともに私も議論に参加しました。表現の自由、ジャーナリズムといった分野は、他のユネスコの活動分野に比べると私にとってやや馴染みが薄い分野でしたが、ウクライナでのジャーナリスト安全確保や、南スーダンでの地元メディアのキャパシティビルディングのユネスコの事業に日本は協力しています。大変興味深い議論に参加できて良かったと思います。

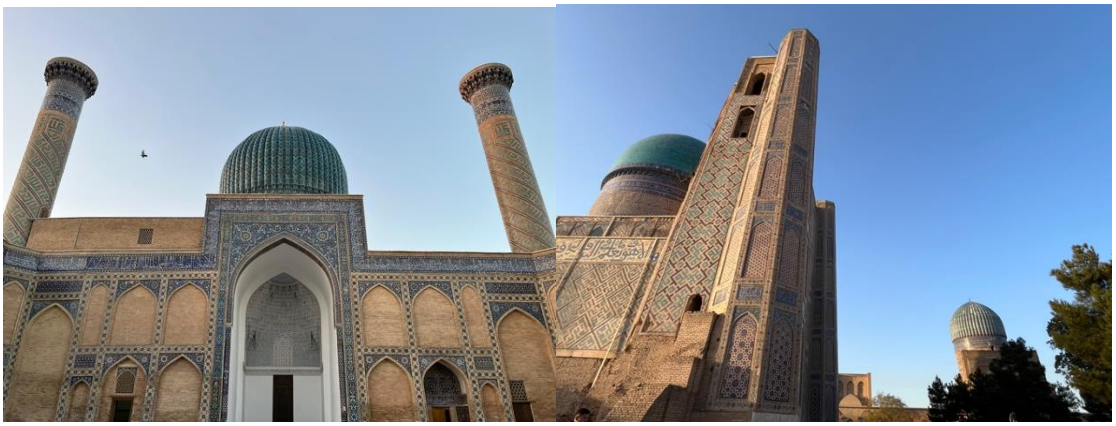
表現の自由に関するパネル・ディスカッション

（ウズベキスタン：東西文明の結節点）

ウズベキスタンはユーラシア大陸の真ん中、中央アジアにある内陸国、それも周りも全て内陸国という、世界に２カ国しかない「二重内陸国」の１つで

す。周りを海に囲まれている日本とはかなり環境が異なります。今回のユネスコ総会出席は、このウズベキスタンという国に対する理解を深める良い機会となりました。

開催地となったサマルカンドは、１４世紀～１５世紀に栄えたティムール帝国の首都として知られています。現在の街の中心部にある歴史的建造物の多くは、ティムール朝の創始者アミール・ティムールとその子孫によるものですが、それ以前にも、この地にはアレクサンダー大王、僧玄奘、アラブ、イラン系、トルコ系、モンゴルなど、様々な人々、民族が足を踏み入れ、文明が交差する場所でした。サマルカンドは２００１年に「文化交差路・サマルカンド(Samarkand-Crossroad of Cultures)」として世界遺産に登録されています。



シャーヒ・ズィンダ廟群（上）、グーリ・アミール廟（下左）、ビビハニム・モスク（下右）

また、今回のユネスコ総会では多くのウズベキスタンの学生達がボランティアとして我々各国代表団をサポートしてくれました。日本代表団のリエゾンを務めてくれたファランギスさんが通っているシルクロード国際観光文化遺産大学(Silk Road International University of Tourism and Cultural Heritage)にもお邪魔しました。日本留学経験もあり流暢な日本語を操る日本語クラスの先生に案内して頂きました。２０１８年に出来た比較的新しい大学ですが、ホテル、運輸、通訳など観光産業への人材供給の役割を担っています。研修施設には、各国料理のレストランのテーブル・セットの模型として、日本の掘りごたつもありました。

ウズベキスタンは人口４０００万人超で中央アジアでは最大、年間の新生児数は日本を大きく上回る１００万人を超える若い国です。それだけに雇用の受け皿として観光などサービス産業に寄せられる期待も高いのではないかと感じました。

サマルカンド市内にあるシルクロード国際観光文化遺産大学

総会期間中の週末には、高速鉄道でサマルカンドから２時間かけて、イスラムの古都ブハラを訪れました。９～１０世紀にイラン系サーマーン朝の首都、１６世紀初頭から２０世紀初頭まで存在したブハラ・ハン国の首都でもあったところです。モスク、マドラサ、タキ（市場）が集まる旧市街は、「ブハラの歴史地区(Historic Centre of Bukhara)」として１９９３年に世界遺産登録されています。

ブハラの歴史地区

ウズベキスタンの首都タシケントにも足を伸ばしました。ここには第二次世界大戦後、シベリアに抑留された日本兵の方々の足跡があります。ウズベキスタン全土で約２５０００人が送られ、約８００名の方々が現地で亡くなられました。市の外れにある共同墓地の一角に日本兵８７名の方々が眠る墓地があります。共同墓地の向かい側には、抑留者の生活ぶりを伝える写真や手紙が展示されている資料館があります。地元のウズベキスタン人である、ジャリル・スルタノフ氏が個人的に収集した資料を自宅で展示したのが始まりで、昨年拡張されたそうです。

タシケント市内には、日本人抑留者により建設され、１９６６年の大地震にも耐えたことで有名なナヴォイ劇場があります。１９９１年のウズベキスタン独立後に、当時のカリモフ大統領の命により、その功績を讃えるプレートが設置されています。

日本人抑留者墓地（上左）、日本人抑留者関係資料館（上右）、ナヴォイ劇場（下）

（憲章採択８０周年、ユネスコは「たゆたえども、沈まず」）

ウズベキスタン・サマルカンドから戻って最初の週末、１１月１６日日曜日はユネスコ憲章採択８０周年でした。１９４５年のこの日、ロンドンにおいて署名され、翌１９４６年に発効、ユネスコが発足します。日本が加盟したのはその５年後、１９５０年１２月に申請を行い、翌１９５１年７月に加盟を果たします。戦後日本が最初に加盟した国際機関です。

１６日の朝は、前日に正式に就任したエル・アナーニー新事務局長や有志の各国ユネスコ大使達とともに、セーヌ川沿いをジョギングしました。エッフェル塔から出発し、川沿いにルーブル美術館の向かい側まで走り、近くのカフェで休憩、しばし懇談した後、戻ってくるコースです。新事務局長は就任初日にも、全加盟国宛メールでメッセージを送るなど、各国との対話を重視する姿勢を示しているとの印象でした。

エル・アナーニー事務局長および各国大使とのジョギング

２０日木曜日には、総会での選挙結果を受けた新たな構成国による初の執行委員会が開催されました。エル・アナーニー新事務局長が就任後初めて出席するユネスコの公式会合でもあります。

今回の執行委員会は、議長、副議長、関係委員会の議長を決めるためのもので、半日で終了しました。地域グループの輪番で決まる新たな執行委員会議長には、アラブ・グループ（グループⅤb）の代表としてカタールのナセル・ヒンザブ大使が選出されました。また副議長は、６つの地域グループから選出されますが、日本は地域グループⅣの副議長に選出されました。

執行委員会終了後の昼休みの時間帯には、日本代表部主催によるレセプションをユネスコ本部で開催しました。これは３つの周年、すなわち、ユネスコ憲章採択８０周年、日本のユネスコ加盟申請７５周年に加え、日本が重視してきた持続可能な教育（ESD: Education for Sustainable Development）に日本が支援を開始してから２０周年を記念するためのものです。レセプションに先立ち、ベナン、ブラジル、パナマの３団体に対するESD-Japan賞の授与式を行ったほか、レセプションでは、裏千家の森宗勇氏による呈茶が行われました。

ESD-Japan 賞授与式（左）、森宗勇氏による呈茶（右）

レセプションでは、新任のエル・アナーニー第１２代事務局長に加え、パリ訪問中の松浦晃一郎第９代事務局長がスピーチを行ったほか、ボコバ第１０代事務局長、アズレー第１１代事務局長がビデオメッセージを寄せてくれました。存命中の４人全てのユネスコ事務局長の肉声に触れる良い機会となりました。

ユネスコ憲章８０周年、日本の加盟７５周年記念レセプションでの歴代事務局長によるメッセージ（出典：ユネスコ）

レセプション冒頭の挨拶で、私からは、憲章が採択された当時、第二次世界

大戦終結から間もなく冷戦の兆しがあらわれ、アジア、アフリカ、中東の各地で紛争が続いていた厳しい国際情勢の中でも、各国はユネスコの理念に希望を見出したことに触れ、８０年前と同様に厳しい困難にユネスコが直面する中でも、新たな事務局長をはじめ新体制で始動するユネスコを皆で支えていくべきことを訴えました。

「たゆたえども、沈まず(Fluctuat Nec Mergitur)」

様々な困難に翻弄されながらも、耐え抜いてきた歴史をもつパリ市の標語（ラテン語）です。エル・アナーニー事務局長という新たな船長を得たユネスコが、米国脱退に伴う予算減や、多国間主義（マルチラテリズム）全般への逆風にどう対処していけるかは、新体制の手腕と加盟国の支持に掛かっていると言えます。

レセプションでの筆者スピーチ

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大